（民間企業の卒業生から）

琥珀色の時間と、銀色の言葉

中部電力株式会社
（名古屋大学仁科研究室１９８７年修了生）
角田　利晴

メールボックスの検索窓に「仁科」と打ち込むと、そこには知性と慈愛に満ちた、温かな言葉が整然と並んでいる。仁科浩二郎先生。先生とのやり取りは、いつもどこか背筋が伸びるような心地よさと、包み込まれるような安らぎが同居していた。

大学を卒業後も、先生には仲人を引き受けていただいたり、私の米国留学にあたり推薦状をいくつも書いていただいたり、研究室の同窓会のことで相談に乗っていただいたりなど、色々な場面でお世話になった。

私たちの交流の舞台は、時に名古屋・栄の「西原珈琲店」であり、時に豊田の「明楽時運（アラジン）」であった。いずれもレトロで落ち着いた雰囲気の喫茶店である。コーヒー一杯の価格改定に驚きつつも、「楽しい時間を過ごすためなら少々奮発してもいい」と綴る先生の言葉には、日常の細かな変化を楽しむ心の余裕が滲んでいた。

仁科先生は、私の体調を誰よりも気遣ってくれる人でもあった。私が無理を重ねて体調を崩したとき、先生は「油断せずに怠けること」という、一見逆説的で、しかし真理を突いた助言をくれた。「リラックス」の大切さを説くその筆致には、ご自身の父上の背中を見てきた経験からくる、深い説得力が宿っていた。

専門分野である原子核工学の話題になると、言葉はより研ぎ澄まされていた。私がかつて院生時代に経験した「臨界」の原体験について語った際、先生は「的確な言葉で誠に説得力がある」と手放しで喜んでくれた。教育者として、次世代が現場で感じる「違和感のない感覚」を何よりも尊ぶ先生の姿勢に、私は改めてこの道の深さを教わった。

そして、先生の父上である仁科芳雄氏の『書簡集』制作を巡る日々。膨大なゲラを前に、索引作りに没頭する先生の情熱は、まさに歴史を編む者のそれだった。ページ数が減り、予定価格が少し下がるかもしれないといった事務的な報告の中にさえ、一冊の本を世に送り出すことへのプライドが感じられた。

メールという現代的な道具を使いながらも、先生が綴る一通一通は、まるで丁寧にしたためられた手紙のようだった。デジタルな画面越しに届くその言葉は、今も私の中で、あの喫茶店で流れていた琥珀色の時間と同じ輝きを放っている。

もうそのメールを受け取れないと思うと寂しさは尽きませんが、在りし日の姿を心に刻みつつ、ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。